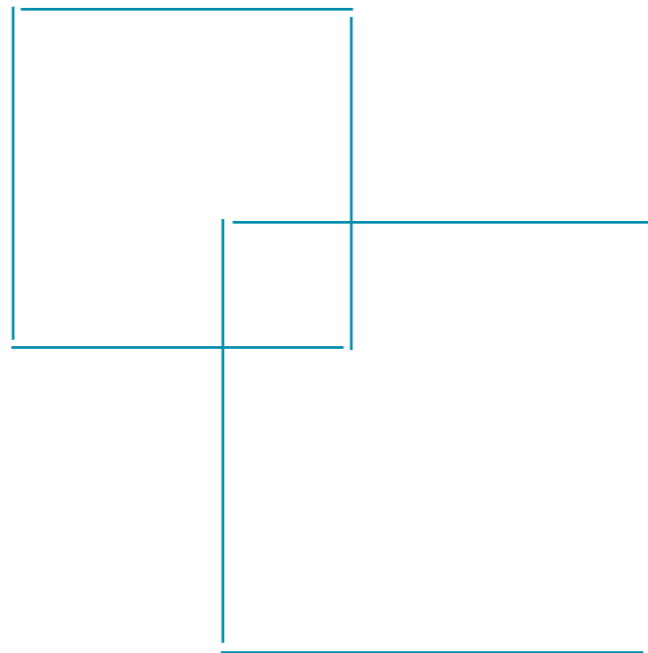
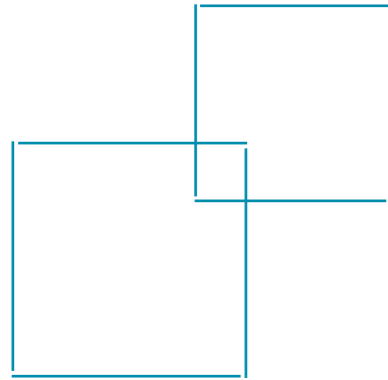


主催 愛知県

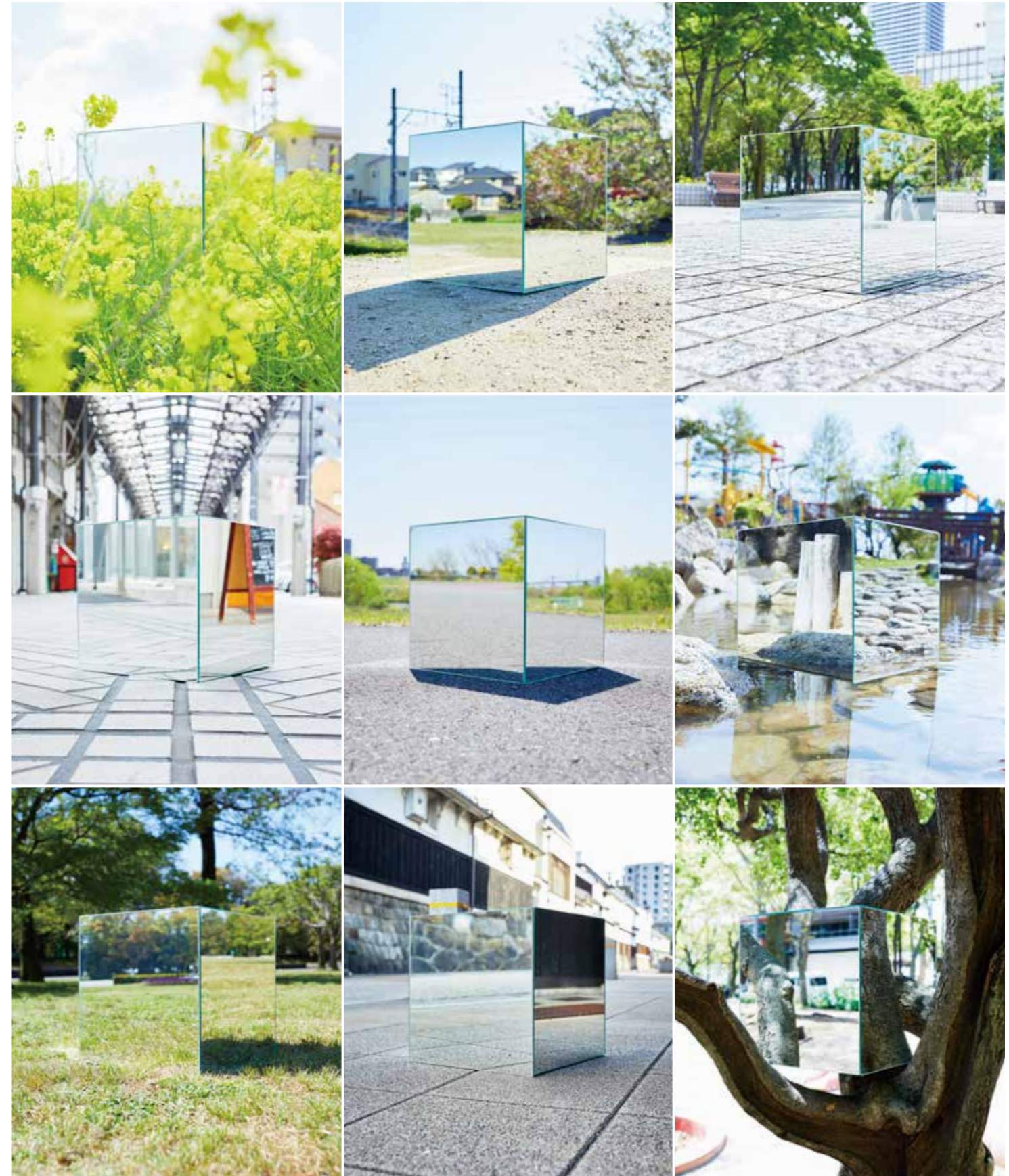
後援 愛知県市長会
愛知県町村会
愛知県商工会議所連合会
中部経済同友会
愛知県都市計画協会
中部デザイン協会

協賛 (公社)愛知建築士会
(公社)愛知県建築士事務所協会
(公社)日本建築家協会東海支部愛知地域会
(一社)愛知県建設業協会
(一財)東海建築文化センター
愛知県建築技術研究会



第27回 愛知まちなみ建築賞

表彰作品集 2019



ART DIRECTION+DESIGN 高柳新・田中晋一 (CAMP inc.)

愛知まちなみ建築賞について



愛知県知事
大村 秀章
Hideaki Omura

愛知県では、魅力的な地域づくりには良好な景観形成が必要と考え、平成5年度に「愛知まちなみ建築賞」を創設しました。本賞は、地域における新しい建築文化の創造に寄与しているものや、地域のまちなみに調和し魅力的な景観の形成に寄与しているものなど、社会的貢献度の高い建築物やまちなみを表彰するもので、魅力ある地域環境の形成を図ることを目的としております。

今回は55作品の応募をいただきました。これらの作品の中から、選考委員会で厳正な審査を行なっていただき、最終的に7作品が受賞する運びとなりました。

今回の受賞作品は、新旧施設を融合させてひとつの風景となる姿を目指したものの、住まいの外壁が隣戸へ伝わり新たなまちなみをつくり出しているもの、海辺の既存施設を改修して眺望と防砂機能を強化したものの、透明性をもった吹抜空間により地域と繋がる仕掛けをつくり出したもの、内と外の領域を曖昧にし人と関わり合う子育ての場を提案したものの、大学敷地と周辺地

域の歴史を見出し当時の建築の再表現を試みたもの、共有空間をシェアした新たな住まい方によるコミュニティづくりを目指したものなど、いずれも個性豊かで、まちの魅力アップに貢献している作品ばかりでした。これらの受賞作品がこれからも多くの人々の共感を呼び、また地域の魅力ある景観づくりに寄与していくことを期待しています。

最後になりますが、広くご関心を寄せていただいた県民の皆様をはじめ、熱心に審査していただいた選考委員の皆様、温かいご支援をいただきました後援・協賛団体の方々へ、深く感謝申し上げます。今後とも県民の皆様と連携して魅力と潤いのある地域づくりに取り組んでまいりますので、引き続きご理解とご支援をお願い申し上げます。

受賞作品 (50音順)

- 01 阿久比町庁舎 [知多郡阿久比町大字卯坂]
- 02 あそのびハウス [名古屋市名東区]
- 03 海辺の別荘 野間の改構 [知多郡美浜町大字野間]
- 04 藍晴会 たけなか外科内科こどもクリニック [名古屋市北区金城町四丁目]
- 05 町営住宅河和第二団地 [知多郡美浜町大字河和]
- 06 南山大学 教室棟 Q棟 [名古屋市昭和区山里町]
- 07 MOBTOWN ミナミシモハラ [春日井市南下原町一丁目]



練り込み技法による記念銘板
作/陶芸家 水野教雄

良好なまちづくりを進めていくためには、建築物及びまちなみが地域環境の形成に積極的に関わり、一定の社会的役割を果たしていくことが重要であるという認識の下、募集条件に適合しているもののうち、良好なまちなみ景観の形成や潤いのあるまちづくりに寄与する等、良好な地域環境の形成に貢献していると認められる建築物又はまちなみで、次の基準のいずれかに適合し、かつ社会的貢献度の高いものを選考する。

選考基準

- 1 地域における新しい建築文化の創造に寄与しているもの。(以下例示)
 - 新しいまちなみの形成を先導し、モデルとなるもの。
 - デザインに優れ、地域環境の形成又は新しい地域環境の創造に寄与しているもの。
 - 周囲への配慮がなされ、地域の魅力を高めているもの。
- 2 地域のまちなみに調和し、魅力的な景観の形成に寄与しているもの。(以下例示)
 - 地域の風土を生かし、地域文化の継承に寄与しているもの。
 - まちなみに調和し、地域の特色ある景観を創造しているもの。
 - 建築協定等の住民の主体的な活動や総合的な計画等により、まちなみ景観が形成されているもの。
- 3 魅力と潤いのある空間の創造に寄与しているもの。(以下例示)
 - 緑化、せせらぎ等の、地域に魅力と潤いを与える空間を創出しているもの。
 - 通り抜け空間や開放ギャラリー等の、地域コミュニティの形成に寄与しているもの。
 - 地区計画等の詳細な整備計画や住民活動等により、良好な地域整備が図られているもの。
- 4 その他、本賞の趣旨に適合し、地域に貢献しているもの。

選考経過

推薦・応募対象	愛知県内で、平成26年4月1日から令和元年8月20日までに建築又は改修等された建築物やまちなみで、選考基準のいずれかに該当するもの。
推薦・応募期間	令和元年7月1日から令和元年8月20日まで
推薦・応募総数	55作品
第1回選考委員会	令和元年8月26日 1次選考を行い、20作品を二次選考対象とした
第2回選考委員会	令和元年10月29日 2次選考を行い、7作品を選定
表彰式	令和2年1月30日

選考委員

(順不同/敬称略)
★印は選考委員長

★ 武藤 隆	大同大学 教授
谷田 真	名城大学 准教授
溝口 周子	名古屋造形大学 准教授
太幡 英亮	名古屋大学大学院 准教授
村山 顕人	東京大学大学院 准教授
森 真弓	愛知県立芸術大学 准教授
柳澤 講次	公益社団法人愛知建築士会 会長
松岡 由紀夫	公益社団法人愛知県建築士事務所協会 会長
吉元 学	公益社団法人日本建築家協会東海支部愛知地域会 地域会長
砂原 和幸	愛知県 建築局長
鎌田 裕司	愛知県 都市整備局長

阿久比町庁舎

あぐいちょうちようしゃ

まちなみ建築賞総評

平成5年から始まった「愛知まちなみ建築賞」は、今年で27回目を数え、今回が令和に入って最初の回となる。

今年度は、県内各地から55作品の応募があった。愛知県の「人にやさしい街づくりの推進に関する条例」に適合しないもの1点を除外して、54作品を審査の対象とした。地域ごとでは、名古屋市が20点、尾張地域21点、西三河地域11点、東三河地域3点となっており、昨年度とほぼ同様な分布であった。1次選考では、この中から20点を2次選考対象作品とした。10月29日に行われた2次選考では、作品ごとの詳細資料・図面ならびに現地撮影した映像資料などを用いて選考委員による討議を行い、7作品を選定した。

受賞した個々の作品についての詳細は各委員の講評をお読みいただきたいが、今回の審査全体でやや気になった点としては、昨年度まで続いた大規模な作品の応募が少なくなり、比較的小規模の作品が多かったことだろうか。とはいえ、やはりここ数年の傾向である、敷地に対して建築単体だけではない複合的な提案や、増築やリノベーションなど、「再生」に関わるものが多く残ることとなった。「町営住宅河和第二団地」と「MOBTOWN ミナシモハラ」は、同じ集合住宅でありながらも、従来のように縦に積層するタイプのものではなく、敷地内に豊かなパブリックスペースを引き込み、住人間はもちろんのこと、他者とのコミュニケーションの創出につなげる空間の提案であり、人口減少時代における、前者が新しい公共団地の、後者が新しい民間賃貸集合住宅のかたちの試金石となるのではないかと思う。「阿久比町庁舎」と「海辺の別荘 野間の改構」は、前者は中央公民館を残し、改修しながらそれと一体化しながら町庁舎を新築したケースと、後者は建て替えのできない敷地条件の中で、海に面したロケーションを最大限に生か

したささやかな別荘の改修と、規模は違えども、現代ならではの「再生」への手ごたえを感じさせられた。純粋な「再生」とは言えないが、「南山大学 教室棟 Q棟」は、アントニン・レーモンドによりつくられたキャンパスにおいて、継承すべきデザインや景観と、現代ならではのあり方を融合させ、新築でありながらあたかも「再生」であるかのように思わせた力作である。また、これまで記した傾向に直接関わるものではないが、「あそびハウス」や「たけなか外科内科子どもクリニック」は、既存住宅地へ良好な作品を置くことにより、周囲に対して景観的な影響を生み、それを増幅させるものとして高い評価を得た。

近年の選考では、建築単体のあり方に対する評価だけではなく、道路と敷地と建築の関係性やそのあり方によって産み出されるパブリックな空間そのものに対してどのような提案をしているかや、新築の建築としての評価だけではなく、「再生」に関して残すことと新たに作ることにしてどのようなバランスで提案をしているかなど、近年ならではの視点で「まちなみ」から建築を評価する「愛知まちなみ建築賞」のあり方や役割が、より明確化されてきていると実感している。



大同大学教授

武藤 隆

| Takashi Muto



阿久比町は、知多半島の中央部に位置し、平地とその周りを囲む丘陵地からなる自然豊かなまちである。町役場は、町域のほぼ中心にありアクセス性の良い立地であるが、敷地内は高低差があり分棟で使いにくいことが課題であった。その課題を克服し、まちの交流活動および災害対策の拠点として再整備することが求められていた。

本件は、阿久比町の新庁舎棟を始めとした施設を現地建替えした作品である。敷地内には中央公民館を残し、新たに新庁舎棟と多目的ホール、食堂などを新設し、加えて地域コミュニティの場となる「みんなの広場」を中央に整備したことによって、町民が集まる拠点としての機能を大きく高めることとなった。

また、各施設間に配された半屋外の軒下空間である「縁側モール」は、建物同士を繋げる通路の役割を担っているだけでなく、施設間の連続性をつくり出している。加えて、段状駐車場から各施設までをゆるやかに階段やスロープで繋ぐことにより高低差を解消し、敷地内を一体化しつつ全体のボリュームを抑え、自然豊かなまちの風景に馴染ませている。

合理的な施設構造と無機質な意匠を纏う多くの庁舎建築にあって、既存建物との一体化を図りつつ、風景に溶け込む親しみやすい町役場を実現させた点が評価された。

いずれ訪れるであろう中央公民館の建替えを含めた、町役場の将来の姿にも期待したい。

●砂原 和幸 Kazuyuki Sunahara

建築主	阿久比町
設計者	株式会社 安井建築設計事務所
施工者	鴻池・岡戸特定建設工事共同企業体
概要	主要用途 庁舎、公民館
構造	鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造
階数	地上4階、塔屋1階
敷地面積	16,975.27㎡
建築面積	4,245.60㎡(既設を除く)
延床面積	9,080.44㎡(既設を除く)



1,2 photo/上田 新一郎[エスエス] (2017) 3, photo/浅川 敏 (2018)



01

あそのびハウス

あそのびはうす

名古屋市名東区



建築主 塩田 哲也
 設計者 塩田有紀建築設計事務所
 施工者 株式会社 岡本建設
 概要 主要用途 専用住宅
 構造 鉄筋コンクリート造
 階数 地上2階
 敷地面積 190.20㎡
 建築面積 95.42㎡
 延床面積 161.52㎡

私たちが暮らす「まちなみ」は、複雑で捉えどころがなく、手の施しようのない風景だと観念している人も多い。特に戸建住宅が並ぶ風景は、道路境界に塀が立ち、隣地境界に1mほどの隙間と、公私の区別が強く意識され、「まちなみ」にまで気を配る余裕をなくしているように見える。「あそのびハウス」は、そんな現代社会において当たり前となっている風景の中において、住まいとまちとの関係のあり方を示唆している。

この計画では、経年変化による風景への早期溶け込みを意識した杉板仕上げの外壁や、街路樹に呼応したナンキンハゼの植栽など、

外回りを中心に「木」という要素を使い、柔らかく心地よい空間が作り出されている。そしてこれら外部に対する対処の方法が隣家に伝わり、自然と「まちなみ」になっている点に、ここからの居住環境づくりへの可能性を感じた。

審査過程では、前面道路に面した土地の過半が駐車場に捧げられている空間構成の中で、住民らによる「伸び伸び活動」が街角にまで溢れ出てくるのか議論もあったが、「木」を介した外装・外構の設えと、それら施しが周囲に伝播したという事実が、何よりも高く評価された。 ●谷田 真 Makoto Tanida



1,2,3 photo/鈴木 文人(2018)



3

海辺の別荘 野間の改構

うみべのべっそう のまのかいこう

知多郡美浜町大字野間



1

「この建築のどこがいいのだ」というご意見もあるであろう。私の育った小さな家の横には乳白の塩ビ小波板で覆われた物置がくっついていて、そこには使わなくなった乳母車や農機具、大切な自転車、ストックしている古新聞など様々なものが押し込まれると共に、家に西陽がダイレクトに入るのを和らげていた。建築空間に「主」と「従」の役割を与え、それらを組み合わせる事によって多種多様な生活に対応する。それぞれの空間には違った役割があり、同じ性能、強度、耐久性を持つ必要はない。時代や要求によって変化しても良いと常々考えている。

この別荘では既存である鉄筋コンクリート造

タイル張りの「主空間」にポリカーボネイトの小波板で作り替えられた「従空間」が絡み合う、しかしここでは従だけではなく自然を防御するための「従空間」が「主空間」に影響を与え、ここでの暮らしを「塩と砂の土地」に着地させている。作者は改修前の姿より、より本来の姿に戻すこの手法を「改構」と名付けている。

現在、都市にあふれている単一的な建築に多様なディメンションを付加することによって、機能的に対応するだけでなく、本来の建築空間自体も変えていく可能性をこの建築は示している。 ●吉元 学 Manabu Yoshimoto

建築主 イシダ総合システム株式会社
 設計者 ナノメートルアーキテクチャー
 施工者 平田建築株式会社
 概要 主要用途 別荘、保養所
 構造 鉄筋コンクリート造、木造
 階数 地上2階
 敷地面積 259.42㎡
 建築面積 106.28㎡
 延床面積 176.50㎡



1,2,3 photo/Ryuji Inoue(2018)



3

02

03

藍靖会 たけなか外科内科こどもクリニック

あいせいかい たけなかげかないかこどもクリニック

名古屋市北区金城町四丁目



建築主 医療法人 藍靖会
たけなか外科内科こどもクリニック / 竹中 拓晴
設計者 TSCアーキテツ / 田中 義彰
施工者 東海インブル建設株式会社
概要 主要用途 診療所
構造 鉄骨造
階数 地上2階
敷地面積 711.59㎡
建築面積 374.00㎡
延床面積 543.37㎡

この建物のある北区金城町は特に特徴のあるまちではない。以前は店舗、工場、住宅と混在した町であり、地下鉄駅からは遠く、庄内川にかかる新川中橋、名西橋との間に立地し交通量だけは非常に多い場所である。

この病院はガラス張りで中がまる見えである。患者にとっては、余りガラス越しに見える外部は必要ないと思うが、大胆に診療部門と外部との間に「縁側」があり、その先に長い「軒」、夜間には周りの道路と一体となる「光」がセットされている。

病院という性質上、病気ではないときには「縁側」には上がりにくいが、「軒」「光」だけでも地域の住民と医療サービスの関わりが持てる、楽しい建築である。

都市には空き家が増えても身近に「お医者様」がいるので、住む人は幸せである。その幸せをもっと密度の濃い物にしてくれるこの「縁側」と「軒」「光」である。

今後地域の特徴は薄れてくと思うが、この3つのファクターが、周辺の「まちなみ」「住みやすさ」「医療サービス」に大きく貢献してくれると思う。 ●柳澤 講次 Koji Yanagisawa



1,2,3 photo / Hiroshi Tanigawa [ToLoLo studio] (2019)



1,2,3 photo / Hiroshi Tanigawa [ToLoLo studio] (2019)

町営住宅河和第二団地

ちょうえいじゅうたくこうわだいにだんち

知多郡美浜町大字河和



海側に整然と並ぶ箱型の既存積層団地とは対照的に、開放的な緑の中に配置された深い軒の白木の住戸群は、実際に潮の香りの中で見るとどこか南の島を思い起こさせた。不揃い且つ計算されたゆとりある住宅の配置や大きな空が見える低い平屋には、積層団地には無い人間らしさが感じられる。高度経済成長時代、効率の良い画一的な積層型団地がひしめき合うように建設され、似たような殺風景なまちなみを作っていた。時代が変わり現在の縮小型社会では、その積層型団地の空室が目立つ。

町営住宅河和第二団地はこうした社会の

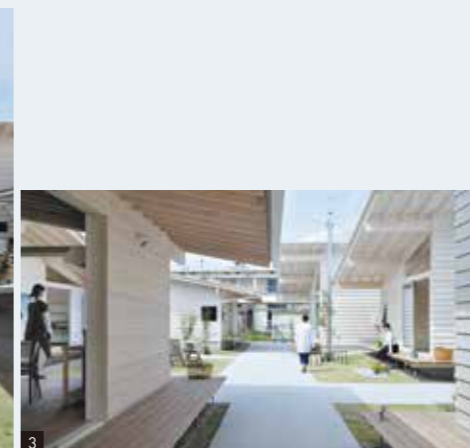
変化を受けて、住戸数を減らして地面に近い生活を提供し、子育てしやすく高齢者にもやさしい団地となっている。住宅の間には開かれた庭と路地、路地に面して縁側とリビングが繋がる。この内と外のゆるやかな繋がりが人との関わりを持ちやすくし、お互いを助け合う住人同士のコミュニティが生まれている点が高く評価された。ただ開放的であるがゆえに、交通量の多い道路側のプライバシー確保やセキュリティの問題が同時に課題となるだろう。とはいえ、殺風景な団地のまちなみを人間らしい団地のまちなみへ、可能性が周辺へ広がっていくことを期待する。

●溝口 周子 Shuko Mizoguchi

建築主 美浜町
設計者 栗原 健太郎+岩月 美穂
studio velocity一級建築士事務所
施工者 伊藤組建設株式会社
概要 主要用途 町営住宅
構造 木造
階数 地上1階
敷地面積 2,205.45㎡
建築面積 607.58㎡
延床面積 497.00㎡ (49.70㎡/棟)



1,2,3 photo / 栗原 健太郎 (2017)



1,2,3 photo / 栗原 健太郎 (2017)

04

05

南山大学 教室棟 Q棟

名古屋市昭和区山里町

なんざんだいがく きょうしつどう きゅうどう



建築主 学校法人 南山学園
 設計者 株式会社 日本設計 / 株式会社大林組名古屋支店
 施工者 株式会社大林組名古屋支店
 概要 主要用途 学校(大学)
 構造 鉄筋コンクリート造
 階数 地下1階、地上7階
 敷地面積 118,001.11㎡
 建築面積 2,226.38㎡
 延床面積 13,600.67㎡

南山大学キャンパスは、フランク・ロイド・ライトの助手として帝国ホテル建設にあわせて来日し、その後多くの日本人建築家を育てたアントニン・レーモンドの計画によって1964年に誕生した。丘陵地の自然地形を活かしたキャンパスの、尾根に沿ったメインストリートの北端に、新たに建設されたのが「教室棟Q棟」である。

高低差のある地形に馴染む建築であり、コンクリート打放しの構造体とプレキャストコンクリートのルーバー、赤土色の外壁など、キャンパスの歴史的意匠を踏襲している。この外壁色やルーバーなどはモックアップ検討を重ねて

造られ、内外に渡り細部まで入念にデザインされている。低層部はとても開放的で、ラーニングコモンズや講義室など、開かれた学生の拠点として設計されている。

建築集合体として南山大学キャンパスを見たときに、尾根沿いの建築群が強固なリンクージュを持つ集合体として確立されていることがわかる。そしてこのリンクージュは50年以上に渡る改修や新築を経て「継承」されてきたものである。先人の建築家が作り出した意匠と、長年積み重ねられた歴史的景観に対するリスペクトが十分に表現されており、まちなみ建築賞に相応しい。 ●太幡 英亮 Eisuke Tabata



1,2,3 photo/滝田 良彦 [滝田フォトアトリエ] (2017)



3

MOBTOWN ミナシモハラ

春日井市南下原町一丁目

もぶたうん みなみしもはら



本物件は、4棟の住宅と共有スペースからなる賃貸住宅である。敷地内の余剰空間をシェアする事によって、新たなコミュニティの生成と住まい方の提案を目指したものである。

敷地全体は鋭角な交差点に隣接する三角地である。そこに、シンプルなボリュームの4棟がランダムに配置されている。各棟の間には遊歩道がレンガで形成され、道路面から敷地の内部になだらかに人を導く。その動線上に各戸の軒下空間がせり出すように配置され、緩やかに共有されている。共有スペースに配置された共用の井戸は、住人が自由に使うことができる。遊歩道上に張られたカラフルなタープは日除けとなり、人が集う場となるとともに、空間にアクセントを与え、この物件のシンボルともなっている。

ここでは、住民が自らコミュニティを育むことを促すための、積極的な仕掛けが施され、まちなみ創造への挑戦とも感じられる。「みんなのまち」と名付けられたこの場所から、新たなストーリーが紡ぎ出される。 ●森 真弓 Mayumi Mori

建築主 井村 正和
 設計者 ジンバルワークス
 施工者 株式会社協和コーポレーション
 概要 主要用途 専用住宅(賃貸)
 構造 木造
 階数 地上2階
 敷地面積 629.52㎡
 建築面積 234.75㎡
 延床面積 397.52㎡

1



1,2,3 photo/ Hiroshi Tanigawa [ToLoLo studio] (2018)



3

06

07